**川崎　むつを （かわさき・むつを）**

**１、プロフィール**

大正13年、口語歌を作り歌誌「オリオン」などを刊行。日本口語歌推進者の１人。鳴海要吉の継承者として「波止場」を主宰。青森啄木会会長等を歴任。

＜生没＞

1906（明治39）10月３日 ～2005（平成17）９月８日

＜代表作＞

歌集『カムサッカの歌』『出帆旗』『流氷』

原三千代との合同歌文集『波止場』

＜青森との関わり＞

東津軽郡新城村（現青森市）に生まれた。

**２、作家解説**

大正13年に、歌誌「牧歌」をガリ版刷で創刊。新城の黎明草舎で淡谷悠蔵の指導を受け、ここで見た鳴海うらぶる（要吉）のローマ字詩集『TUTI NI KAERE』に衝撃を受け、口語歌に改めた。14年に「牧歌」を「オリオン」と改題、これを主宰した。県内初めての口語歌誌であった。昭和５年東奥日報口語歌選者、11年口語歌誌「出帆旗」創刊、13年渡満、満州新短歌協会を作り「短歌開拓」を創刊。新日本歌人協会および青森県啄木会を結成、23年県文化振興会議の結成に参加。31年「青森文学」創刊。34年青森市文化団体協議会を結成､事務局長｡60年鳴海要吉著『Usio no oto』を日本語訳で刊行。青森市短歌連盟顧問。県歌人懇話会理事。青森文学会代表。青森啄木会会長として、啄木の歌碑を県内に３基建立、毎年啄木会を行うなど日本口語歌推進者の１人であり、鳴海要吉の継承者として「波止場」を主宰。新日本文学界青森支部長として、県内外の文化の向上、発展に貢献した。

代表作（歌集『出帆旗』より）

南方十字星の輝く海で　荷に積んだ時計も鳴らう　日本を恋ふて　　　むつを

君が想ひ　君が果さざりし大業は　いま我が胸に火の如く燃ゆ　　　　むつを

青森市民褒賞（昭和47年）、新日本歌人協会功労者賞（昭和55年）、青森県歌人功労賞（昭和56年）､青森県文化振興会議表彰（平成元年）､県芸術文化振興功労賞（平成５年）を受賞。

**３、資料紹介**

〇歌集『出帆旗』

図書

1935（昭和10）年12月31日

190mm×154mm

第二歌集。昭和２年から６年までの口語歌351首を収める。竹内俊吉の序文、川崎文男の文、大川澄夫の跋文、斉藤英太郎の装幀、花岡謙二の序歌、木下茂の木版画、と至れりつくせりの歌集で、叙情的な、みずみずしい、青春の歌がその内容である。